

## 論文の要旨

論文題目 クロアチアにおけるマリア信仰とクロアチア民族主義  
氏名 磯村 尚弘  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成23年3月25日

本論文では、クロアチア民族主義の宗教的側面が、クロアチアでのカトリック教会のどの部分にあらわれ、それが主に 20 世紀にどのように展開してきたのかを明らかにすることを目的とした。つまりカトリック教会がクロアチア民族主義にどのようにかかわり、またクロアチア民族主義をどのように利用して自らの存続を図ったかを、世俗的な民族主義運動にも目を配りながら分析した。各章の概要は以下の通りである。

まず序章では、これまでのクロアチア民族主義の分析が「言語（クロアチア語）」を中心とした世俗的な側面に偏っている点を批判し、その原因として、A・D・スミスが民族主義は世俗的な現象であり、宗教は直接には関係ないという見解をもつ研究者をさして呼ぶ「モダニスト」の持つ視点の影響があるのではないかと指摘した。

そこでこうした「モダニスト」による分析の限界についてM・K・ユルゲンスマイヤーや中島岳志の論を引用して批判した後、スミスが提唱する「聖なる紐帯」という概念による、クロアチア民族主義の宗教的側面の分析の可能性について検討した。その結果スミスが示したこの「聖なる紐帯」という概念は、我々が分析の枠組みとしてそのまま利用するよりも、クロアチアの例で言うならばカトリックの聖職者がカトリック教会やカトリック教会の教義、そしてマリア信仰とがクロアチア民族にいかにかぎに長きにわたって影響を与え、その民族の重要な一部となってきたかを主張するとき用いられる視点を分析する枠組みとして解釈したほうがよいとする結果に至った。

よって本論文では、スミスが提示した「聖なる紐帯」としてのネイションという定義とこれを支える四つの条項という概念に着目し、それらがいかにカトリック教会の聖職者らによって用いられ、またマリア信仰という枠組みの中でクロアチア民族主義に宗教的基盤を与えていったのかについて、1971年8月にクロアチアのザグレブでおこなわれたマリア学の国際会議とマリヤ・ビストリツァで行われた式典を対象として考察することとした。

第1章では、クロアチアのカトリック教会が、19世紀にクロアチアでおこった「イリュリア運動」と呼ばれる民族再生運動やイリュリア運動によって誕生したクロアチア民族主義とユーゴスラヴィズムにどのように関わったかを考察した。

カトリック教会の聖職者はイリュリア運動以前からクロアチアの文化、特にクロアチア語の成立に深く関わってきた。そして19世紀に展開するイリュリア運動においては、聖職者が言語や文学のサークルを結成して活動するなどしてこの運動に積極的に参加した。

イリュリア運動以降、ユーゴスラヴィズムの啓蒙、普及活動においてJ・J・シュトロスマイエルやF・ラチュキが、カトリック教会主導による東西両教会の統一というカトリック教会が掲げる理念と絡み合わせてではあったが、ユーゴスラヴィズムによる南スラブ諸民族の統一という理念を発展させ、後世に継承した。こうした理念は（シュトロスマイエルやラチュキが提唱したままではないにしても）1918年に建国された「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」という国家で具体化することとなる。

ところで第一次バチカン公会議以降、強化された教権主義への反発の影響を受けて、クロアチア民族主義やユーゴスラヴィズムは主に世俗的な知識人や市民が中心となって展開していくこととなった。これ以降カトリック教会は「カソリック・アクション」とよばれる運動のもとで反教権主義や自由主義に対抗する活動が続けられた。そうした展開の中、マリア信仰を中心とした宗教活動が大規模に行われるようになる。

その一方、20世紀以降のユーゴスラヴィズムやクロアチア民族主義運動は、言語学者や文学者、

作家といった知識人や市民が中心となって活動が行われていく。そのとき彼らが自らの主張するイデオロギーの象徴として挙げたのが言語であった。つまりユーゴスラヴィズムの理念の下では、統一された言語といえる「セルビアクロアチア語」の整備が行われた一方、クロアチア民族主義の理念の下ではクロアチア語の独自性を追求する研究が精力的に続けられたのである。なおこうした双方の活動は第二次大戦後も継続され、社会主義政権の下で「セルビアクロアチア語」の整備は政府の言語政策の一環として行われた一方、「クロアチア語」の独自性の追求は、ユーゴスラヴィア内でクロアチア語を独立した一言語として認めるよう要求する運動に発展し、第Ⅲ章で考察する「クロアチアの春」でクロアチア民族主義が高揚する重要な要素となった。

第Ⅱ章ではクロアチアにおけるマリア信仰、特に 15 世紀末よりクロアチアのザゴリエ地方に存在するマリヤ・ビストリツァでのマリア信仰とクロアチア民族主義の関連について考察した。

5～6 世紀頃からキリスト教世界に普及し始めたマリア信仰は 10 世紀以降クロアチアでも行われるようになり、15 世紀末には黒マリア像を信仰の対象とするマリヤ・ビストリツァという聖地も生まれた。マリヤ・ビストリツァの黒マリア像は、戦災を逃れるために土中に隠された後自ら光り輝いて自らの居場所を知らせたとか、火災にあっても焼失しなかったなどといった「奇跡」を起こしたとされ、「クロアチアの女王」または「最も忠実なるクロアチアの庇護者」と呼ばれるようになってしだいに信仰を集めるようになった。

20 世紀以降、民間信仰ともいえる状況であったマリヤ・ビストリツァでのマリア信仰にバチカンやクロアチアのカトリック教会は本格的に関与するようになり、数万人から数十万人規模の信徒を動員して聖体拝領の儀式などを執り行うようになった。これ以降カトリック教会は、「クロアチアの庇護者」として崇拝されているマリヤ・ビストリツァのマリア像に対して聖体拝領などの儀式を行うために多くの信徒を動員するようになる。こうしたマリヤ・ビストリツァでのマリア信仰は、ザグレブ大司教であった A・ステピナツによって第二次大戦後には社会主義政権の抑圧的な政策に抵抗するひとつの重要な手段として利用された。

第Ⅲ章では、1971 年 8 月にクロアチアのザグレブでおこなわれたマリア学の国際会議とマリヤ・ビストリツァで行われた式典について考察した。

1960 年代からクロアチアで始まった、これまでの中央集権的な体制を変革し連邦内の各共和国へのさらなる分権化を要求する運動は、クロアチア語に確固とした法的地位を求める運動を誘発し、クロアチア語を中心とした民族主義運動の高揚を招いた。この運動は、連邦政府が掲げていた「友愛と団結」というスローガンに象徴されるユーゴスラヴィズムというイデオロギーがクロアチアにおいては結局普及せず、王国時代よりくすぶり続けた言語をめぐる問題が全く解決していない事を浮かび上がらせたといえる。そして社会や政府への不満を、クロアチア語を中心とした民族主義が容易に拾い上げ、一気に拡大することを示したのである。その結果民族主義運動は知識人だけでなく一般市民や学生にも波及し、最終的にはクロアチアの分離独立要求という形で暴走し、連邦政府の介入と運動の弾圧という結果を招いた。

一方第二次大戦後のクロアチアのカトリック教会は、政府による統制によって活動を制限されてきたが、1971 年にマリア学国際会議とマリヤ・ビストリツァにおける大規模な式典を行うことができた。こうした式典が開催できた背景にあったのは、第二次バチカン公会議に影響を受けて 1966 年にバチカンとユーゴスラヴィアの間で締結された協定により、カトリック教会の活動にたいする政府の統制が大幅に緩和されたことと、カトリック教会が、教会以外の組織と全方向的な関係をもったことにあるといえる。こうした関係をバランスよく保つ事で政権との関係を良好に保ちつつ、マリア信仰を介してクロアチア民族としての一体感を利用して教会としての勢力を保つことができたのである。

こうして統制が緩和された状況の中でカトリック教会は活発な活動を展開した。その象徴的なものがマリア学国際会議とマリヤ・ビストリツァでの式典である。このマリア学国際会議やマリヤ・ビストリツァでの式典では、カトリック教会が掲げた対話によるエキュメニズムの推進をアピールする一方、弾圧の中クロアチア人が敬虔なカトリック教徒として、カトリック教会とマリア信仰を守り続けてきた伝統を強調した。そして国外に移住した人々も含めたクロアチア民族の団結を訴え民族の一体性をアピールしたのである。

しかしこうした状況は「クロアチアの春」の鎮圧以降変化する。政府の統制が再び強化されたからである。ただこうした中でもカトリック教会は、マリア信仰を軸に活動を継続させていったのである。

結論では、Ⅰ章からⅢ章までの考察を総括して、クロアチア民族主義の宗教的な側面はカトリ

ック教会に支えられており、その宗教的側面は特に 1945 年以降のマリア信仰とマリヤ・ビストリツァでの式典の開催をきっかけとして、言語を中心とした世俗的な民族主義運動にかわって、クロアチア民族主義を宗教的な側面から担うようになった点を指摘した。